法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

イディッシュ語と英語の相互作用 : 予備的概念

河野, 徹

(出版者 / Publisher)
法政大学教養部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編
(巻 / Volume)
65
(開始ページ / Start Page)
43
(終了ページ / End Page)
73
(発行年 / Year)
1988-02
(URL)
https://doi.org/10.15002/00005281

Hosei University Repository

イディッシュ語と英語の相互作用
——予備的概観——

河野　徹

1. イディッシュ語の発達

1.1 定義と現況

イディッシュ語は，中・東欧ユダヤ人（Ashkenazi Jews）及び世界各地に四散したその子孫たちが，過去1,000年にわたって使用してきた言語である。'Yiddish' の語源はドイツ語の 'jüdisch' といわれるが，イディッシュ語で 'yid' は「ユダヤ人」の意味だから，ユダヤ人が話し，ユダヤ的生活と不可分の言語と考えればよい。この言語の草創期たる10世紀初めから18世紀末のゲットー解放に至るまで，即ちユダヤ人が各居住国の国語を第一常用語として使い始めるまで，イディッシュ語は，西はオランダから東はウクライナまで，北はエストニアから南はルーマニアまで，つまりヨーロッパのほぼ全域で，ユダヤ人の話し言葉として他に比肩するものがなかった。

現在イディッシュ語を国語とする国はないけれども，アメリカ合衆国（ユダヤ系人口570万，以下同様），イスラエル（347万），ソ連（157万），フランス（53万），イギリス（33万），カナダ（31万），アルゼンチン（23万），南アフリカ（12万），ブラジル（10万），オーストラリア（7万5千），ハンガリー（6万2千），メキシコ（3万5千），ルーマニア（2万6千）等，全世界に散在するユダヤ人1,300万の内，[1] いまだに約400万がイディッシュ語を母語（mama-loshn）として用いている。[2] 合衆国に限っていうと，イディッシュ語の話し手の数はたしかに漸減しつつあるけれども，1980年度の国勢調査で，ユダヤ系総人口の四分の一に当たる140万人強がいまだにこの言語を母語としてあげている。[3]

1.2 系　　譜

イディッシュ語は，系譜的にいえば，現代標準ドイツ語と同じく印欧語族・

Hosei University Repository

ゲルマン語派・西ゲルマン語の高地ドイツ語に属する言語だが,[4] 以下に略述するとおり，話し手のユダヤ人が，宗教的，学問的伝統の媒体たるヘブライ語・アラム語要素を温存しつつ，移動する度にその定住先の日常語，とりわけ東欧のスラブ系諸語，米英加濠その他英語文化圏の英語，また中南米のスペイン語と融合を繰り返してきたので，ドイツ語の一方言とみなすことはおろか，ドイツ語との類似性をあてにすることも穏当ではない。

1.3 ラーズ語要素

10世紀に入って，フランスと北イタリアのユダヤ人が，新しい商業中心地を求めてドイツ西部のケルンからシュパイエルに及ぶラインラント地方に続々と移住し，そこで遭遇した中高ドイツ語を，それまで用いていたロマンス語系のラーズ語（Laaz もしくは Loez）に重ね合わせるという離散ユダヤ人特有の融合方式（fusion formula）で，イディッシュ語を作り上げた。この場合は，ラーズ語に重ね合わせたというよりも，ラーズ語に覆いかぶせたというべきかもしれない。

ラーズ語は，古フランス語に属するユダヤ人常用語で，『聖書』及び『タルムード』の注釈者として名高いラシ（Rashi, 1040-1105）が用いた言葉として，また中世フランス語研究の重要資料としても注目されている。上記ラシは，1096年の第一次十字軍によるユダヤ人虐殺の際ラインラントから周辺各地へ避難した人々が，「アシュケナジー語」（loshn ashkenaz）を話したと述べているから,[5] ラーズ語と初期イディッシュ語は並存していたと考えるべきだろう。

ラーズ語経由でイディッシュ語に摂取されたロマンス語の例をいくつかあげてみる。

‘bentshn’「(食前の）祈りを唱える」（ラテン語‘benedicere’「祝福する」から）

‘leyenen’「(聖典を）読む」（ラテン語‘legere’「読む」から）

‘tsholnt’「(安息日用の）五目煮」（安息日には火を一切使えないため，金曜日につくり，かまどの余熱で温めて置く。ラテン語‘calere’「温めてある」の現在分詞‘calentem’から）

‘Bunim’（男性名，古フランス語‘bonhomme’「紳士」から）

‘Yentl’（女性名，古イタリア語‘gentile’「優しい」から）

等がよく知られている。

Hosei University Repository

1.4 イディッシュ語の成立

ラーズ語地域からラインラントに定住したユダヤ人は，なぜイディッシュ語を発達させなければならなかったのか。ユダヤ人に共通の精神的遺産を継承しながら，周囲の非ユダヤ人社会に適応し，必要とあればその影響を吸収して商業上の便宜を図る，即ち内外両面で自集団の保全を果たすというのは当然の大前提だが，何よりもその実現を促したのは，当時この地域で方言の分裂が急激に進み，ユダヤ系住民も自らの共通語（lingua franca）を作り出す必要に迫られたからだという。[6]

その上，1179年と1215年のラテラノ公会議でキリスト教徒とユダヤ教徒の隔離が決定され，その結果ゲットー内に囲い込まれたユダヤ系住民が，自らの新しい常用語をさらに発酵させたのだろう。

1.5 ヘブライ語要素

イディッシュ語形成の際，主成分たる中高ドイツ語に融合されたラーズ語は，すでにヘブライ語・アラム語要素を多く含んでいたのだから，イディッシュ語の前史としてさらに2,500年を付け加えることできよう。ヨーロッパ諸語におけるギリシア語・ラテン語要素が「語源」に属するのに反して，イディッシュ語に取り込まれたヘブライ語・アラム語要素は，発音こそイディッシュ化しているが，綴字は（発音通りの表記を採用したソ連方式を除き）原語そのままだから，[7] ヘブライ・アラム「語源」というのは当たらず，むしろ「現役要素」というべきである。

ヘブライ語・アラム語は，『モーゼ五書』（*Torah*），『口伝律法』（*Mishnah*），『祈禱書』（*Siddur*）の用語であり，ユダヤ的内面生活の糧として，ヘブライとかアラムとか厳密に区別されることもなく，数多くの語句が離散当初から各地ユダヤ人の常用語，いわゆるユダヤ諸語に受け継がれていた。（本稿では爾後ヘブライ語要素と一括して呼ぶことにする。）

それなのに，なぜヘブライ語がヨーロッパのユダヤ人の共通語たり得なかったかというと，古いセム語で，非ユダヤ人社会への適応に不便というだけでなく，ユダヤ人自身がヘブライ語を敬遠していたからである。聖典の用語を日常語に濫用すべきでないという考え方は，現在でも超正統派ユダヤ教徒が堅持しており，彼らはたとえヘブライ語に通じていても，日常生活，そして聖典講義にさえイディッシュ語を用いる。ユダヤ人庶民の大半は，日々の祈禱を通じて，

Hosei University Repository

ヘブライ語の音読はできたが，文法的に内容を読解するところまでは及ばなかった。

そもそもヘブライ語は，学者たる男性の言葉で，女性はその学習の機会すらめったに与えられなかったから，母子間の対話は当然イディッシュ語であった。ユダヤ人の涙と笑いを吸い取った言葉は,やはり名実ともに母語(mama loshn)たるイディッシュ語であった。この人間味豊かな混成語は，ヘブライ語という畏れ多くて近付き難い「聖なる言葉」(loshn koydesh) から，その文字と断片的語句を借用して，やっと文語らしい体裁をつけた言語だけに，ヘブライ語に対するその精神的劣位は拭い去るべくもない。

しかし，その反面，ユダヤ人が周囲の抑圧にめげず，自らのユダヤ性を保てたのは，連綿たる宗教的，学問的伝統ゆえだから，ヘブライ語はやはり民族的矜持の核でもある。イディッシュ語中のヘブライ語要素が，いまだに20パーセントを占めているのはそのためであり，その学習上，発音上の不便さにも拘わらず，末永く継承され続けるだろう。

イディッシュ語に融け込んだヘブライ語要素としては，'khayim'(Chaim)，'sore'（Sarah）等の人名，'toyre'（Torah)，'peysekh'（Passover,「過越祭」)，'mirtsishem'（God willing, ヘブライ語 'im irtse hashem'「もし神がお望みならば」を短縮したもの)等の宗教関係，'bris'「割礼」，'khasene'「結婚」，'levaye'「葬式」等の習俗関係，'emes'「真実」，'tsedoke'「慈悲」，'eytse'「忠告」等の道徳関係が大半を占めるけれども，'kimat'「ほとんど」，'tomid'「いつも」，'sho'「時間」（英語の 'hour'）といった基本語彙にもヘブライ語起源のものが少くない。

ユダヤ的諸価値のいわば通奏低音としてイディッシュ化したヘブライ語・アラム語要素を，マクス・ワインライヒは SHaS 要素と称している。[8] SHaSとは，ユダヤ教が禁圧されたその昔，『タルムード』の別称として用いられた *Shisha Sedarim*（*Six Orders*「全6編」）の頭字語（acronym）である。SHaS 要素は，啓蒙運動の影響で大分中和されたとはいえ，日本語に滲透した仏教語よりずっと色濃くイディッシュ語を染め上げており，どんな世俗的，反宗教的ユダヤ人も，イディッシュ語を用いる限り，SHaS 的表現を避けて通るわけにはいかない。日本語の読解に漢語辞典が不可欠なのと同様，"Hantbukh fun hebreyzmen"（Handbook of Hebraisms）の類を備えずにイディッシュ文学を研究するのは無理である。

Hosei University Repository

1.6 スラブ語要素

ラインラントのユダヤ人は，12世紀後半の十字軍以降14世紀中葉の黒死病に至るまで反ユダヤの迫害が相次いだため，ライン川西岸から東岸へ，さらにユダヤ人保護憲章を宣布していたポーランドへと移動を余儀なくされた。その移動先でスラブ系融合言語のクナーニック（Knaanic）を用いていた土着のユダヤ人と接触するが，ドイツ風の文化と言語が忽ち優勢を占め，イディッシュ語が，ユダヤ人社会の常用語となった。以上の経緯をふまえれば，スラブ語圏に幾世紀も久しく定住してきた東欧ユダヤ人の言語が，なぜいまだにドイツ語要素をその最も顕著な特徴としているのか，了解し得よう。

ドイツ語圏からのユダヤ人大挙移動で東欧ユダヤ人社会の勢力は伸張し，彼らの常用語としてイディッシュ語の地歩も固まった。1250年から1500年までに用いられた初期イディッシュ語文献としては，1272年にヴォルムスで作られた祈禱書写本（エルサレム・ヘブライ大学図書館所蔵）くらいのものだが，1500年から1700年までの中期イディッシュ語になると，早くも印刷術発明以前に，聖書聖典がヘブライ語から翻訳され，1580年頃大部の民話・伝説・説教集 *Mayse Bukh*（*Book of Stories*）が一般庶民向けに刊行された。[9] その他，書簡，年代記，史詩の形で文献が残っており，当時の口語表現を偲ばせる。しかし東欧出自のテキストが不足な上，所詮文書用の文語表現は長期にわたって画一性を保つから，イディッシュ語発達に重大な役割を果たした口語の方言化やスラブ化が，当時どのように進行していたのか，その過程はまだよく把めていないようだ。[10]

スラブの海に囲まれて，スラブ系諸語の影響を受けずにすむことは勿論あり得ない。ドイツ語の衣をまとったイディッシュ語が，今度はスラブ語のアクセサリーを身につける。この段階で白ロシア語，ウクライナ語，ポーランド語等からイディッシュ語に取り込まれた単語をいくつか並べてみる。

‘mutshen’（動）「いじめる」，‘nudzhen’（動）「退屈させる」，‘praven’（動）「挙行する，祝う」；‘kantshik’（名）「（私塾のヘブライ語教師が振う）鞭」，‘shmate’（名）「くず」；‘paskudne’（形）「不劣な」；‘take’［tá:kə］（副）「まったく」；‘khotch’（接）「…だけれども」；‘nu’（間）「さて」；‘zhe’（小辞）「それでは」等。また人間のタイプを表わす-nik（‘nudnik’「野暮天」，‘olraytnik’「成金」など後述の yinglish で頻用）や親愛の情を示す -nyu（‘gottenyu’「神様」，‘tattenyu’「お父様」）もスラブ語要素である。

Hosei University Repository

このようにスラブ化が進むにつれ，ドイツ語圏から伝わった西イディッシュ語の標準文語は，東欧ユダヤ人の日常語とそぐわなくなり，19世紀初頭には東イディッシュ語の標準文語が発達していた。

イディッシュ口語は，4種の方言に大別される。(1)東北（リトアニア）イディッシュ語はリトリニア，白ロシア，東北ポーランドで，(2)東南(ウクライナ)イディッシュ語はウクライナ，東ガリチア，ルーマニア，東南ポーランドで，(3)中央（ポーランド）イディッシュ語は1939年当時のポーランド・ドイツ国境からウィスワ・サン盆地までの地域で，また(4)西イディッシュ語は上記独波国境の西側で各々用いられた。以上4方言の最も顕著な相違は母音で，‘one day’を意味する東北方言は‘eyn tog’，東南方言は‘eyn tug’，中央方言は‘ayn tug’となり，東北方言では長母音と短母音を区別しない。この東北方言が標準的発音となるが，文法に関しては，多くの場合中央方言が標準となる。[11]

1.7 キャリバン的言語

18世紀後半にハシディズムが興り，東イディッシュ語がその敬虔主義的・神秘主義的信仰の表現媒体として活用された。同じく18世紀中葉から19世紀後葉にかけて，モーゼス・メンデルスゾーン（1729—86）の影響を受けた「啓蒙運動」(Haskalah）が西欧さらに東欧各地のユダヤ人社会へと広がり，ゲットー生活に伴う迷信，思想的画一，貧困など社会的後進性の打破を唱え，ハシディズム側からの烈しい非難と抵抗に耐えながら，世俗的外来文化の摂取を促した。

ハスカラ運動の推進者たち（maskilim)は，ハシディズム教徒や未開化の一般庶民が用いていたイディッシュ語を迷信の象徴として把え，逆に啓蒙の象徴としてヘブライ語を蘇生させた。彼ら「マスキリム」は，詩人，小説家，ジャーナリストそして一般知識層にも利用可能な現代ヘブライ語の基盤を築き，やがてシオニズムへの道をつけることにもなる。しかし彼らの啓蒙主義は，全東欧に拡がったユダヤ人に対する組織的迫害という厳しい現実の中で，その社会的展望の狭隘さを露呈し，やはり大衆を動かすには，彼らの常用語たるイディッシュ語に拠る他ないことが明らかになる。イディッシュ語のカウンター・カルチャー的側面が，すでにこの辺から仄めいているといえよう。

とはいっても，イディッシュ語に対するユダヤ人知識層の軽蔑の念は根深く，19世紀イディッシュ語文学の三本柱と称されるメンデレ・モイヘル・スフォー

Hosei University Repository

リム（1835—1917），イツホック・ペレツ（1852—1915），ショロム・アレイヘム（1859—1916）も，当初はヘブライ語で書き続けていた。この堅苦しい言葉を使っていたのでは，一握りの教養人にしか読んでもらえないと悟って，はじめてイディッシュ語に切り替えたのである。ショロム・アブラモヴィッチがMendele Moykhel Sforim つまり「本売りのメンデレ」，またショロム・ラビノヴィッチが Sholem Aleykhem つまり「平和をあなたに」というイディッシュ語の筆名を用いたのは，本名でイディッシュ語の小説を書くことがためらわれたからだという。

ヘブライ大学のダン・ミロン教授が，彼の19世紀イディッシュ文学論に付けた『変装の旅人』（*A Traveler Disguised*）という標題は，まさにそういう含みであり，同書の第二章「キャリバン的言語」(" A Language as Caliban ") は，奇形で滑稽なイディッシュ語を，シェイクスピア作『大嵐』中の醜悪野蛮な半獣人キャリバンになぞらえたものだ。[12] キャリバンはともかく，イディッシュ語を「醜いアヒルの子」扱いする風潮は，現在も衰えていない。

1.8 民族語としての地位

ゲットー解放とともに，西ヨーロッパ諸国では，イディッシュ語から各国常用語への切り替えが相次いだが，東欧ユダヤ人の社会に関する限り，常用語としてのイディッシュ語の地位は不動であった。

1860年代に民族意識旺盛なイディッシュ語の新聞，雑誌が続々刊行され，これに呼応してイディッシュ文学も開花期を迎えようとしていた。一言語が文学を成立させるには，前以て全方言を統括する体制が必要だという。この体制を固めるのに貢献したパイオニア的作家が，メンデレ・モイヘル・スフォーリムであった。彼はハシディズムとハスカラが各々に抱えていた思想的限界を超克し，多種多様な方言や文語表現を統合して，イツホック・ペレツ（Itskhok Leibush Perets），ショロム・アレイヘムら後進のために突破口を開いた。もはやドイツ語風の文型に拠らず，方言差を超えた標準イディッシュ語が急速に普及し，組織的な社会運動，文化活動の気運も高まって，1908年にはブコヴィナ地方の首邑チェルノヴィッツで，イディッシュ語会議が催された。作家，詩人，言語学者，各地域指導者，報道関係者らが参席したこの会議で，イディッシュ語は，ヘブライ語とともにユダヤ民族語の一つと定められ，その結果，学校教育，学術研究，地方行政にも導入されて，一層の基盤拡大をみた。

Hosei University Repository

1.9 政争の道具

20世紀に入って，イディッシュ語は政治闘争の道具となった。ポーランド，リトアニア，ロシアのユダヤ人労働者総同盟，通称「ブンド」は，1905年と1917年のロシア革命にも加担した社会主義者の大集団で，世俗主義，不可知論，さては無神論を精力的に唱道し，宗教色濃厚なヘブライ語の使用や，階級闘争軽視のシオニズムに断乎反対していた。その結果イディッシュ語は，労働者大衆の言語として脚光を浴びることになり，宗教面，文学面に次いで社会運動面でも磨きをかけられた。ほどなく大挙渡米した新移民たちは，この争議慣れしたイディッシュ語で，労働搾取工場（sweatshops）の経営者に立ち向うのである。

他方シオニスト側は，イディッシュ語を，離散の汚辱から生まれ落ちた私生児的言語と断じ，民族「正常化」のためにヘブライ語の復活と普及を図ったから，必ずしもシオニズムに共鳴していなかったヘブライ語学者たちまでが，シオニズムの肩を持ち始めた。

ところがアメリカのシオニストは，世俗主義的労働シオニスト（labor Zionist），つまりシオニスト兼社会主義者であった。シオニズムは民族運動であるのみならず，社会主義的理想でもあり，社会主義的シオニズム以外のシオニズムはあり得ないという立場だから，[13]社会運動と不可分のイディッシュ語をむしろ振興させるため，次々にイディッシュ語学校を設立した。アシュケナジー文化を考える際には，宗教面，芸術面とともに社会運動面も念頭に置くべきである。イディッシュ語がアメリカで第二の黄金時代を迎えた一要因として，ユダヤ系労働運動が果たした活発な役割を見逃すわけにはいかない。

2. アメリカへ渡ったイディッシュ語

2.1 「貧乏ないとこ」と「金持の伯父さん」

1880年代から1910年代にかけて，ロシア帝政の使嗾による「ポグロム」（ユダヤ人迫害）が相次ぎ，再びユダヤ人の大移動が始まった。1920年代までに250万の東欧ユダヤ人が，政治的自由と経済的機会を求めて，アメリカの岸へ津波のように押し寄せ，彼らよりも数十年早く，ヨーロッパ中に吹き荒れた革命反革命の嵐を避けてアメリカに定着していた25万のドイツ系ユダヤ人を不安に陥れた。

洗練されたドイツ語に比べてイディッシュ語というのは，実に耳障りな「ジャルゴン」だが，そのイディッシュ語に劣らず東欧ユダヤ人も粗暴な連中であ

Hosei University Repository

り，この「貧乏ないとこ」（'poor cousins'）の出現で，主流文化にうまく適応していたドイツ系ユダヤ人の評判が損われはしないか，と怖れたのである。東欧ユダヤ人側も，アメリカ主流文化にかぶれ切っているドイツ系ユダヤ人に軽蔑と不信の念を禁じ得なかった。

ドイツ系ユダヤ人の指導者アイザック・メイアー・ワイズ（1819—1900）が「連中はユダヤ人（'Jews'）で，われわれはイスラエル人（'Israelites'）なのだ」と喝破したら，東欧ユダヤ人側から「われわれはユダヤ人で，連中は異教徒である」という応答があった。[14]「貧乏ないとこ」東欧ユダヤ人は，「金持の伯父さん」ドイツ系ユダヤ人のことを恩着せがましく，横柄と感じたらしく，いまだに「イェッケ」（'yekke'）と呼びならわしている。レオ・ロステンによれば，この単語には「物知り顔の」（pedantic）とか「融通のきかない」（rigid）といったイメージが伴うようだ。[15]

幾多の摩擦と衝突を繰り返した末，やっとドイツ系ユダヤ人富裕層は，生活と文化受容が不如意な東欧ユダヤ人移民の救済に乗り出し，双方を歩み寄らせるけれども，所詮数十万のドイツ系ユダヤ人は，底知れぬ活力を秘めた東欧ユダヤ人移民数百万の大波に併呑される他なかった。

2.2 イディッシュ語ジャーナリズムと文化変容

東欧ユダヤ人新移民はイディッシュ語を話し，彼らが携えてきた文学，歴史，民間伝承もイディッシュ語を核心としていた。1920年代までイディッシュ語は，家庭でも街頭でもユダヤ系アメリカ人の常用語であった。上陸早々アメリカ社会に溶け込むのは到底無理だし，何よりも戒律遵守の必要上，彼らはニューヨークのロウアー・イースト・サイド，シカゴのウェスト・サイド，ボストンのノース・エンド等ユダヤ人街で郷里そのままにユダヤ教文化を再現した。

しかし周囲の開放的なアメリカ市民生活に触発されることは時間の問題で，みるみる世俗化と文化変容が進展する。新移民の一部は，先述の通り，渡米以前に東欧各地で高水準の社会運動と文化・出版事業を経験しており，ロシア帝政治下とは比較を絶する政治的自由に恵まれた現在，イディッシュ語ジャーナリズムが勃興するのは自然の勢いであった。

1885年から1914年までの間に，150種以上の新聞，雑誌が誕生した。[16] 1897年アブラハム・カーハンが創刊し，自ら編集に当たった総合新聞『フォルヴェルツ』（*Forverts*, 即ち *Jewish Daily Forward*）は，新移民の文化変容を

Hosei University Repository

是認奨励し，その一環として「英語学習欄」まで設けた。対立紙『モルグン・ジュルナル』（*Morgn-Zhurnal*）は，ユダヤ教正統派の立場から『フォルヴェルツ』の同化路線に反対し，ユダヤ性（Yiddishkayt）の保持を訴えた。ユダヤ系アメリカ人社会における同化路線と民族性保持路線の対抗は今なお進行中で，少数民族集団のアイデンティーを論じる際のモデルケースの一つとなっており，その端緒が，はやくも上記両紙の対立に窺われる。

2.3 イディッシュ語演劇の功罪

イディッシュ語ジャーナリズム隆盛の波に乗って，詩と小説がさかんに発表され，先述チェルノヴィッツ会議より4年も早く，1904年にニューヨークでイディッシュ語作家会議が開かれている。この会議で，イディッシュ語はユダヤ民族語なりという確認がすでに行われていた。

イディッシュ語演劇も，ニューヨーク，フィラデルフィア，ボストン，シカゴで活況を呈し，イディッシュ語劇場は合計25館を数えた。とくにニューヨークのセカンド・アヴェニューに林立した劇場街は有名である。お涙頂戴的な（'schmaltzy'）安手のメロドラマも少くなかったが，一流の劇場では名優をそろえ，シェイクスピアからショロム・アッシュに至る広範なレパートリーを誇っていた。その演技水準はきわめて高く，非ユダヤ人の俳優や批評家も賞讃を惜しまなかった。[17] 他方，ロウアー・イースト・サイドに隣接して立ち並ぶ劇場が，『屋根の上のバイオリン弾き』の続編に当たるような移民ドラマを舞台にのせないはずはない。新移民たちは，舞台上で演じられる仲間たちの失敗談や成功談を楽しみながら，アメリカ社会での生き方を学び，英語の手ほどきをしてもらった。

文化変容の必要を強調するということは，とりも直さずアメリカニゼーション，とくに英語使用のすすめであり，これが自縄自縛的に本来のイディッシュ語・イディッシュ文化を衰退させてしまうだろうことは目にみえていた。しかしアメリカの自由に心酔していたユダヤ人移民の前で，ジャーナリズムも演劇界も，アメリカ的生活様式の讃美を止めるわけにはいかなかった。新移民は，英語を習い覚えると，忽ちアメリカン・スタイルの娯楽に惹かれてしまう。最初の劇映画「大列車強盗」が1903年の封切りで，1910年代以降は映画とジャズの時代だし，1920年代に入るとラジオ放送も始まった。

イディッシュ語は英語を吸収できるだけ吸収して，ついには英語というべき

Hosei University Repository

かイディッシュ語というべきか，英語の語彙をイディッシュ語の文型にはめ込むユダヤ風ピジン英語（Yidgin English，あるいは Yinglish）が生じた。'ikh hob getshendzht mayn maynd' などはその典型で，本来のイディッシュ語彙は 'ikh'（I），'hob'（have），'tshendzh'（change）の前後につけた接頭辞 ge- と接尾辞 -t，それに mayn（my）だけで，主要語は全部英語だ。

2.4 イディッシュ語の衰退

かつてヨーロッパのユダヤ系啓蒙主義者たち「マスキリム」に蔑まれたイディッシュ語は，ユダヤ系移民二世からも疎じられた。アングロサクソン風主流文化になじんでエリートの仲間入りを果たしたい移民二世にとって，両親のイディッシュ語，イディッシュ訛りは恥辱以外の何物でもない。イディッシュ語の根絶を念願した啓蒙主義の祖モーゼス・メンデルスゾーンやシオニズムの祖テオドール・ヘルツルの心境は，彼らのものでもあった。

1920年代は，イディッシュ語の受難期である。東欧系，南欧系に不利な1924年の移民制限法で，イディッシュ語の話し手が流入しなくなり，さらに1929年の大恐慌でイディッシュ語文化とくに演劇が痛打を浴びた。時あたかも反ユダヤ主義が全米を風靡し，ナチスと結託したファシスト団体が百以上を数えたから，ユダヤ教やユダヤ文化が大手を振って罷り通る雰囲気ではなかった。

1930年代から1940年代に入っても，イディッシュ語の衰退は続くが，ショロム・アッシュ（1880—1957），ヨセフ・オパトシュ（1886—1954），シンガー兄（Israel Joshua, 1893-1944）とシンガー弟（Isaac Bashevis, 1904- ）など有力作家と数多の詩人が執筆を続け，ニューヨーク中心のイディッシュ語放送も，1930年代半ばから第二次大戦終結の頃までが最盛期だったという。

しかし第二次大戦中ナチスの「最終的解決」即ちユダヤ人大量虐殺でイディッシュ語の話し手の半数が消滅してしまったことは，イディッシュ語そのものの消滅をも予兆するかのようであった。またイスラエル建国に際して，ヘブライ語が公用語と定められたため，イディッシュ語はさらに肩身が狭くなった。シオニストにとってこの混成語は，離散ユダヤ人がなめた屈辱の象徴であるのみならず，ナチスの悪夢がつきまとうドイツ語と同系であり，この一事だけでも新生ユダヤ国家の公用語に採択される見込みは万に一つもなかった。当時イスラエルの狂信的シオニストは，イディッシュ語常用者を脅迫し，イディッシ

Hosei University Repository

ュ語使用の行事を襲撃していた。[18]

2.5 エスニック・ブームとイディッシュ語の蘇生

しかし戦後から1956年のハンガリー事件にかけて，ユダヤ系難民が引き続き渡米し，ソ連からも年々ユダヤ人が出国して，その多くはアメリカに定住するなど，イディッシュ語常用者の流入は絶えていない。

1967年に第三次中東戦争（いわゆる「6日戦争」）が勃発するや，アラブ側に加担したアメリカ黒人と，当然イスラエル支援に立ち上ったユダヤ系アメリカ人との対抗がエスカレートし，ユダヤ人側も黒人同様に心置きなく民族的自負の立場を打ち出した。移民第二世代の同化志向に反発した第三世代が，エスニック・ブームの時流に乗ってユダヤ性探求に乗り出し，ユダヤ系アメリカ人のリベラリズムを特徴づけていた普遍主義が，民族主義と共存し始めた。

ユダヤ系大学はもとより，一般の名門大学までが，ユダヤ研究コースを開設し，イディッシュ語存続の希望が膨らんできた。ウリエル・ワインライヒ著『カレッジ・イディッシュ』は，唯一の本格的初級教科書で，1949年の初版以来四回の改訂を経，なお重版中だが，とくに1965年から1970年までは毎年増刷を記録し，イディッシュ語への関心がこの期間中いかに高まりつつあったかを示している。

2.6 ユダヤ系アメリカ文学の隆盛とイディッシュ語ブーム

アメリカにおけるユダヤ系文学は，1930年代まで，イディッシュ語の作品が優勢を保ちながら，英語の作品と併存しているかたちだった。現在のところ，依然イディッシュ語で執筆し続けているバシェヴィス＝シンガーを例外として，まず英語一色といってよい。

1950年代このかた，ソール・ベロー，バーナード・マラムード，フィリップ・ロスといったユダヤ系作家がアメリカの読書界で絶大な人気を博し，60年代，70年代のアメリカ文壇はユダヤ・マフィアの手中にあると騒がれたほどだ。[19] ユダヤ文学ブームの煽りで，ユダヤ的な経験や特質に関する著述がもてはやされたから，当然ユダヤ人も，自らのユダヤ性と密着したイディッシュ語を見直し始めた。

レオ・ロステンの『イディッシュ語の楽しみ』(1968)[20]や『イディッシュ語万才』(1980)[21]が売れに売れ，より学問的なファインシルヴァーの『イディッ

Hosei University Repository

シュ語の味わい』(1970)[22]やサミュエルの『イディッシュ語礼讃』(1971)[23]も広く読まれている。目下ユダヤ系アメリカ人の間でベスト・セラーといえば，ストラスフェルド夫妻編の『ジューイッシュ・カタログ』三部作だろう。[24]ユダヤ的生活のあらゆる側面を網羅した本だから，当然イディッシュ語関係の記事も収まっており，第1巻（1973）ではそれが6頁，第2巻（1976）では8頁，そして第3巻（1980）では何と25頁にふえているのだ。ユダヤ系アメリカ文学不振の昨今でも，イディッシュ語への関心はますます高まっている，という一つの証拠になろう。

2.7 イディッシュ語出版の現況

イディッシュ語図書の出版になると，話は別だ。年間数千種ベースだった1920年代とは比較すべくもないが，1942年度152種から1983年度112種への下降線は意外に緩漫である。[25] 人文科学，社会科学の論文をイディッシュ語で書く人は今でもたまにいるが，自然科学の方は，イディッシュ語出版全盛時代でさえ啓蒙書に限られていた。この辺にイディッシュ文化の限界がある。

1983年度発行の112冊についてその分類は未詳だが，おそらく宗教書，詩集，格言集，ジョーク集，歌曲集，古典アンソロジー，教科書の類で，書き下ろし小説はまず問題外だろう。I. B. シンガーでさえ，イディッシュ語原稿を英訳させ，それに自ら加筆してはじめて出版の運びになるのだから，彼の作品中イディッシュ語原文で入手できるものはごく限られている。

イディッシュ文語が，創作用というよりむしろ鑑賞用になりつつあることは否めない。マサチューセッツ州アマーストの「ナショナル・イディッシュ・ブック・センター」は，散逸のおそれあるイディッシュ語書籍を収集，保存，頒布する全国的機関で，1980年創設以来，すでに60万冊のイディッシュ語死蔵図書を「救出」した。これによってイディッシュ文化の研究・鑑賞が大いに進捗することは疑いないけれども，その成果が創作に活かされるとしたら，イディッシュ語でなく英語の作品を通じてだろう。第三，第四世代のユダヤ系アメリカ人作家が，それこそ遺伝子にものいわせ，イディッシュ文学の魂を自作に吹き込んだり，詩人であれば，イディッシュ語の作詩法を英語で実践したりすることはあり得よう。

Hosei University Repository

2.8 イディッシュ語の将来

イディッシュ語は，大衆の言語から知識人の愛玩物になってしまったとよくいわれるけれども，現在アメリカで英語以外に母語として使用される言語は，スペイン語，ドイツ語，フランス語，ポーランド語に次いで，イディッシュ語が第6位であり，21世紀に入っても合衆国内で依然100万人がイディッシュ語を話し続けるだろうといわれている。(26)

しかしヘブライ語がアラム語に，アラム語がユダヤ・ギリシア語(Yavanic)に，ラーズ語がイディッシュ語に取って代わられたのと同様，イディッシュ語もユダヤ・英語に放逐されるおそれはないだろうか。ニューヨーク市ブルックリン区のハシド派諸集団合わせて数万人が，イディッシュ語を常用しているのとは別に，一部の正統派神学校（yeshivot）及びその周辺で，英語の文型にイディッシュ語やヘブライ語をはめ込む独特の混成語，スタインメッツのいわゆる「アシュケナジー英語」が用いられている。その一例をあげてみよう。(27)

> We must practice Ahavoh (love) not Sinoh (hate); we must build Yiddishkeit (Judaism), not destroy it. If a non-frum (non-religious) boy moves into your neighborhood,...be mekarev (draw near, be-friend) him. (*Darkenu* [*Our Way*], July 1975, p.7)

'Ahavoh'（イスラエル読みは Ahavah），と'Sinoh'（Sinah）はヘブライ語，'Yiddishkeit'はイディッシュ語，'non-frum'は英語接頭辞とイディッシュ語の混成，'be mekarev him'はイディッシュ語迂言動詞(periphrastic verb)'mekarev zayn'を英語命令文に仕立てたものだ。'zayn'は英語の'be'に当たり，'mekarev'はヘブライ語動詞'karev'「近づく」の男性単数第一，二，三人称共通現在形である。

この手の隠語的表現を理解するには，ユダヤ教，ヘブライ語，イディッシュ語と三拍子揃った背景知識が必要だから，その使用範囲が神学校乃至正統派中核の外部にまで波及するとは思えない。しかし英語の文型が枠組となっている点に，このような宗教集団でさえ英語が第一常用語化しているという現実を認めないわけにはいかない。イディッシュ語とくにその口語が，英語語彙だけでなく英語統語法に侵蝕され続けたら，新しい融合言語のなかに埋没してしまうおそれなしとしない。イディッシュ語の将来について，少くとも悲観的予言が後を断たないことだけは，事実である。

Hosei University Repository

2.9 まとめ

アメリカにおけるイディッシュ語の歴史は，大略3つの段階にまとめることができる。1880年代から1920年代までが黄金時代で，1930年代と40年代には，英語への切り替えが進行したため，第一常用語としての地位を徐々に失う。1950年代に入って，ユダヤ学振興の時期を迎え，以後イディッシュ語文化の研究は大いは進んだが，イディッシュ語による執筆活動は先細りであり，口語についても，英語の滲透が甚しい上，話し手の数が漸減の一途にあり，楽観を許さない。

3. イディッシュ語の英語化

3.1 相互作用の順序

二言語間の相互作用には，優勢語対劣勢語の関係が生じ，通常上位言語が下位言語へ滲透して行く。英語圏へ移植されたイディッシュ語が，英語要素をたっぷり吸収することは，その融合言語としての歴史からしても，自然の勢いであった。

ドーザによれば，外国語の干渉を最も受け易いのは語彙，次に音韻，統語法と続き，「形態（morphology），言語におけるこの砦が最後まで抵抗する」という。[28]

3.2 英語語彙の流入

たしかに，まず英語の語彙がイディッシュ語に流れ込んだ。アメリカ特有の，イディッシュ語の既成概念では表現できないもの，たとえば‘ayzkrim’(ice cream)，‘dzhez’(jazz)，‘londre’(laundry)，‘nikl’(nickel)，‘sobvey’(subway）等，あるいは哲学や科学の専門語，たとえば‘eksistentsiyalizm’(existentialism)，‘pesimizm’(pessimism)；‘astronoyt’(astronaut)，‘laboratoriye’(laboratory)，‘satelit’(satellite）等は仕方ないとして，日常生活の語彙も次々に置換された。‘biznes’(business, [Y] gesheft)，‘boy’([Y]yingl)，‘brekfes’(breakfast, [Y]iberbaysn)，‘padi’(party, [Y]simkhe)，‘saper’(supper, [Y]vetchere)，‘strit’(street, [Y]gas)，‘trobl’(trouble, [Y] tsore)；‘vinde’(window, [Y] fentster）等。

以上のような実語（full words）だけでなく，‘afkoz’(of course, [Y] avade)，‘bekoz’(because, [Y] vayl)，‘enivay’(anyway, [Y] say vi

Hosei University Repository

say), 'pliz'(please, [Y]zay azoy gut), 'shur'(sure, [Y]avade) 等の機能語(functional words)も借用の対象となる。英語風スペイン語(Spanglish), 英語風フランス語(franglais)同様のこの現象を英語風イディッシュ語 (Yinglish), もしくはその話し手の無教養を揶揄して「芋イディッシュ」(potato Yiddish) と呼ぶ。大学や研究機関の専門家たち (Yiddishists) 即ち純正派が, イディッシュ語本来の品格を保とうと腐心する一方で, 市井の許容派は, 民族移動の度に幾多の新しい外国語と戯れ合ってきた札つきの不純言語がイディッシュ語であり, Yinglish も大いに結構と開き直る。

『フォルヴェルツ』紙が日刊から週刊に切り替わった1982年以降は, 編集者に時間的余裕ができたためか, 日刊当時よりも英語風表現 (anglicisms) を控えるようになった。しかしこれも紙面の主要部分だけで, 広告などは, スポンサーの原稿をそのまま印刷にかけるせいか, 'bilding', 'congregeyshon' ([Y] congregatsiye), 'fyuneral direktor' といった Yinglish だらけのようだ。(29)

3.3 借用語の転訛

次に借用の際生じた転訛のうち顕著なものを列挙する。

[æ]→[e]：camp→kemp, gangster→gengster
pineapple→paynepl, tax→teks

[ʌ]→[ɔ] もしくは [a]
bluff→blof, cousin→kozn
luncheon→lontshen, supper→saper

[ə]→[e] Christmas→krismes, picture→piktshe
panorama→panorame, secretary→secreteri

[ə:]→[oi] bird→boyd, certainly→soitinli
first→foist, turkey→toiki

長母音→短母音
agreement→agriment, corner→koner
downtown→donton, highschool→hayskul

[ɛə][iə][ɔə][uə] の発音 ([ə] を省略して [r] を響かせる)
chair→tsher, King Lear→Keneg Lir
store→stor, sure→shur

Hosei University Repository

[w]→[v]　sweetheart→svit-hot, Washington→Vashington
window→vinde, walk→vok

[θ][ð]→[t][d]　third→toid, brother→brodder

その他無声音が有声音に（party→padi），また有声音が無声音に（move→mufn）変ったりする。

3.4　イディッシュ語形態の保存

いくらYinglishでも，イディッシュ語たり得るためには，「最後の砦」たるイディッシュ語的形態を備えていなければならない。

3.41　冠　　詞

不定冠詞は英語と同じa(an)で，語形変化もないから安心だが，定冠詞はドイツ語同様der（男），dos（中），di（女）及び三性共通の複数diからなり，格変化もある。しかし英語から借用したものに三性の何れかを振り分けるのは面倒だから，'di treyn'，'di trok'のように女性定冠詞'di'を頻用する。これは，発音が英語の'the'に近いせいもあろう。

3.42　名詞及び形容詞

借用した名詞には，イディッシュ語の屈折接尾辞を付ける。'shop'の複数形は，変母音と複数語尾を用いて'sheper'，'drayver'（driver）は，'drayvern'，'bukiper'（book-keeper）も同様に'bukipern'となる。

派生接尾辞は多彩で，'olraytnik'「成金」の女性形は'olraytnitse'となり，'boy'にスラブ系縮小辞-tshikを付ければ，'boytshik'，その複数形は'boytshiklekh'となる。同じスラブ系縮小辞-keも愛用され，'rum'（room）に-keを付けて，'rumke'とする。'forman'（foreman「監督」）の複数形には，ドイツ語の'Leute'（people）に相当する-laytを付けて'forlayt'とする。

英語むき出しの形容詞'nekstdorik'でさえ，名詞に付けるときは，'di nekstdorike moid'（the nextdoor maid）と屈折させなければならない。

3.43　動　　詞

動詞も英語そのままの形では用いられず，'afordn'，'atendn'と語尾に-n

Hosei University Repository

を付ける。接頭辞 ge- と接尾辞 -t を前後に付ければ,'gekidnept', 'gebadert' (bothered), 'gemuft' (moved) と自在に過去分詞を作れる。

標準イディッシュ語の慣用句 'geyn shpatsirn'「散歩する」でさえ, 'take a walk' の直訳 'nemen a vok' に代替されているのだから, 英語成句の借用はますますふえるにちがいない。類例は 'run for office'「公職選挙に出馬する」で, 'loyfn far ofis' とやはり動詞部分をイディッシュ語に変えただけの直訳である。

3.5 混 成 語

イディッシュ語と英語の混成も数多く行われる。'supermark' (supermarket) と 'teks-shnitn' (tax cuts) は後半がイディッシュ語, 'freg-program' (quiz program) と 'kvalpen'(fountain pen) は前半がイディッシュ語である。混成語の傑作は'momentbild' (moment+picture→snapshot) と, 'aylsho' である。'ayl-' はドイツ語の 'Eile' (rush) に当たるイディッシュ語, 'sho' はヘブライ語の 'sha'a'(hour)だから, 両方合わせて 'rush hour' となる。

借用で語義が変化する場合もあり,たとえば 'payday' から派生した 'peyde' が「賃金」を意味するようになった。

3.6 統 語 法

まず英語の影響で, 'a miting vet opgehaltn vern' (A meeting will be held) という風に, 受動態の使用がふえた。また英語式に副詞句先行, 助動詞倒置の構文がよく用いられる。'er iz kayn mol nit geven...' (He has never been...) ですむのに, 'kayn mol frier iz er nit geven...' (Never before has he been...) と強調してしまう。

その他, 'ikh ken im far finf yor' (I know him for five years) のように,イディッシュでは不必要な 'far' (for) を挿入したり,'so long as...'の構文をそのまま直訳して 'azoi lang vi er iz nito' (so long as he is absent) としたりする。標準イディッシュ語では, ヘブライ語の 'kol zman...' (all the time that...) を使って, 'kol zman er iz nito' とするところだ。

Hosei University Repository

3.7 まとめ

以上に略述したとおり，イディッシュ語の語彙，音韻，統語法は何れも英語に染まってしまい，極端な例をあげれば，'er hot geketsht a kold.' (He caught a cold.) とか，'ikh vil stapn oyfn koner tsu koyfn a peyper.' (I will stop at the corner to buy a newspaper.) といった言語遊戯的混交文を生じている。しかし再考すれば，イディッシュ語しか話せない親と，英語の方が自由になりつつある子供との間では，この種のクレオールが自然発生するのかもしれない。上記の二つの文もそうだが，キーワードのほとんどすべてに英語を当てるようでは，他国から新たに渡米してきたユダヤ系移民が，ユダヤ系アメリカ人とイディッシュ語で意思疎通を図るのは困難となろう。

4. イディッシュ語が英語に及ぼした影響

4.1 外来要素に対する米語の寛容性

エリック・パートリッジは，『俗語——その現在と過去』のなかで，標準英語の乱れに関するアーネスト・ウィークリーとH. L. メンケンの説を対照させている。[30]「もしアメリカ人が標準語に対して現在のような態度を取り続けるなら，ちょうどイディッシュ語と古典ヘブライ語がそうなってしまったように，アメリカ口語と英語もまったくの別物になってしまうこと必定だ」——こう説くのは勿論ウィークリーの方で，パートリッジはその短慮を諭すかのように，メンケンを登場させるのである——「米語は，外国語圏から到来した移民を介して外国人の言語習慣一般にたえずなじんでいるから，とくに圧力をかけずとも，借用語に対して英語よりはずっと寛大なのだ。同一単語が英米両語の門をノックした場合，米語の方が英語よりも快くそれを迎え入れ，すぐさまそれを広めて，なじませるだろう」米語の門を叩いたイディッシュ語彙も，メンケンの洞察通り，米語の中へ広まり，なじまれたのである。

ウィークリーの上記発言は1929年のものであり，イギリス英語自体が第二次大戦以後アメリカ英語の圧倒的な影響にさらされている事実や，東欧ユダヤ人が前世紀以降イギリスへも大挙移民している事実を考慮すれば，英語のイディッシュ語彙借用に関して英米両語間の区別を立てることは困難と思われる。

4.2 語　　彙

前章と同様，ドーザの説に副って，外国語の影響が最も及び易いという語彙

Hosei University Repository

から始めよう。

イディッシュ語が英語に及ぼした影響を実感する捷径は,たとえば*Webster's New World Dictionary* (Second College Edition, 1982) の sch- で始まるイディッシュ語系の見出し語を拾ってみることである。'schatchen'「結婚周旋屋」,'schlemiel'「うすばか」,'schlep'「とんま」,'schlock'「安物」,'schmaltz'「感傷的表現」,'schmo'「阿呆」,'schmooze'「おしゃべり」,'schmuck'「うすのろ」,'shnook'「弱虫」,'schnorrer'「乞食」等が並び,さらに sh- で始まる'shabos'「安息日」,'shamus'「寺男→守衛,探偵),'shtick'「十八番」もみえる。

The Oxford English Dictionary 補遺第3巻の1529頁などは,ドイツ語系の'schloss'「城」を除き他の見出し語すべてがイディッシュ語系で占められている。上記 *Webster* に載っていない'schlimazel'「不運な奴」,'schlub'「ろくでなし」,'schmatte'「くず」,'schmeck'「ヤク」,'schmegeggy'「哀れな奴」等を収めている他,ユダヤ人,非ユダヤ人を間わずさかんに用いられる軽蔑接頭辞 shm- については,解説8行と例文30行を費している。この言い回しは,日本語の「ハカセかバカセか知らんが,…」に当たるもので,*OED*補遺は次のあまりにも有名な一口噺を例文の一つとしてあげている。「あなたの息子さんはエディプス・コンプレックスですよ」と精神分析家に告げられたユダヤ人の母親が憤然とこう言い放つ—— "Oedipus, Shmoedipus! What does it matter so long as he loves his mother?"「エディプスだか何だか知らないけど,息子が母親を愛してどこがいけないのよ」

ざっと目を通して,まず大半の語が下品であることに気付くけれども,隠語として借用されたのであれば当然の結果だろう。日本でも非行少年は「タンベ」(煙草),「キョンチャリ」(警察),「トラカジャ」(帰ろう)等朝鮮語をよく隠語に用いるという。[31] これは周囲に朝鮮語を知っている人が少いからであり,イディッシュ語彙が,人前を憚る際に恰好な俗語のプールとなったのも,同じ理由からだろう。

イディッシュ語の隠語適性はたしかなもので,1888年頃ボルティモアのドイツ系教師たちが'ganef'「泥棒」,'kosher'「清浄な,まっとうな」,'mazuma'「現ナマ」,'meshuggah'「気ちがいじみた」,'tokus'「尻(けつ)」などを全部ドイツから持ち込まれた形で使っていたという。後日ナチスが,ドイツ語からイディッシュ語要素の一掃を図って果たさなかった,というのも肯けよう。[32]

Hosei University Repository

メンケンの『アメリカ語』(*The American Language*) 初版 (1921) に，イディッシュ語系の俗語がほとんど記録されなかったのは，もっぱら口語として，それも反「公序良俗」的隠語乃至符諜として用いられ，1940年代の性文学解禁まで活字化されることがなかったからだろう。第2次大戦中は，ユダヤ系を含めて諸民族集団出身の軍人が行動をともにしたため，イディッシュ語系俗語の伝播が大いに進んだことだろう。レイヴン・マックデイヴィッド (Raven I. McDavid, Jr) 編の『アメリカ語』縮約版は，付録のなかで4頁にわたりイディッシュ系借用語を扱っている。

語彙との関連で見落せないのは，イディッシュ語と英語の接触から生じた混成語で，二文化併有に伴う最もスリリングな領域の一つといえよう。とくに「…関係者」「…愛好者」を表わすスラブ系接尾辞 -nik は多産的で，'nogoodnik'「役立たず」，'realestatenik'「不動産屋」，'peacenik'「平和運動家」，'cruisenik'「周遊航海マニア」，'straightnik'「(同性愛者からみた) 異性愛者」という風に無限の造語力を秘めている。'phudnik' は 'Ph.D.' と 'nudnik'「退屈な男」の合成で「野暮天学者」の意味だ。親類筋に当る -tshik は，親愛の情がこもり，'milliontshik' といえば，同じ「百万長者」でも，嫉妬や憎悪の対象にならないタイプだという。[33] 'Kosher Nostra'「(ユダヤ教食餌法に照らして清浄な)イタリア料理店」は，もちろん通称マフィアの 'Cosa Nostra' (Our Thing) をもじったものだ。イディッシュ語の 'me ken zi tapn' (One can touch her.) から 'Ms. MacKenzie'「すぐ身体をまかせる女」という隠語ができ，ユダヤ人男性は，ニューヨーク市郊外の Tappan Zee [tǽpən zí:] 橋を渡るとき，この 'zi tapn' を連想して顔を綻ばすという。[34]

4.3 音　　韻

イディッシュ語の音韻は，概してそのまま英語に通用するが，kh (ch) が語頭に来れば，'khale'→'hallah'「安息日用パン」，'khosid'→'hasid'「ハシディズム信徒」のように[x]音が[h]音に変わり，語中，語尾では 'tokhes'→'tokus'「尻(けつ)」や Kreplakh→Kreplach [kréplək]「ユダヤ風ワンタン」のように [x] 音が [k] 音に変わりもする。イディッシュ語を第一常用語としない人が，イディッシュ系借用語を用いる際，schmaltz [ʃmalts] を [ʃmɔ:lts]，schmo [ʃmɔ:] を [ʃmou]，また schmuck [ʃmuk] を [ʃmʌk] という風に，母音を英語化させてしまうだろう。

Hosei University Repository

イディッシュ語を第一常用語とする人々が，イディッシュ語の文中で英語を借用する際の転訛は，すでに 3.3 で略述した通りだけれども，彼らがイディッシュ語でなく，英語を話すときも，同じ訛りが残るはずである。長母音と短母音，有声音と無声音がしきりに逆転するイディッシュ語訛りは，万才や落語における地方弁同様，演芸や文学作品でも効果をあげている。たとえばマラムード作「ドイツからの亡命者」という短編の中で，主人公のドイツ系ユダヤ人評論家がナチスのことを "They are pigs mazquerading as peacogs"（やつらはグジャクに見せかけている豚野郎だ）と罵り，[35] 'right' の発音は，いくら直されても 'ghight' になってしまう。

ロンドン英語やオーストラリア英語に最も特有の音といえば 'paper' [paipə] の [ai] だろうし，イタリア語でそれに当たるのは，第1人称複数現在形動詞語尾の -iamo になろう。そしてイディッシュ語及びイディッシュ風英語で最も耳慣れする音は 'oy' だろう。英語の [ə:] が [oi] と発音されるので頻度が高いということもあろうけれども，'oy' は何よりも，喜怒哀楽のあらゆるニュアンスに即応し得る間投詞として，ユダヤ人の生活にしみついているからだろう。レオ・ロステンは 'oy' 'oy oy' 'oy-oy-oy' の用法を29通りもあげている。[36] 'oy' の補充として 'nu(?, !)' 'nu-nu?' があり，これもまた，あらゆるニュアンスの顔面表情に即応し得るもののようである。[37]

4.4 形　　態

イディッシュ語が英語を借用する際，イディッシュ語の形態にこだわったように，英語がイディッシュ語を借用する際も，英語の形態を崩さない。

まず名詞の複数形をみよう。'goy'「異邦人，非ユダヤ人」のイディッシュ語複数形 'goyim' は，複数表示の屈折接尾辞 -im を外されて 'goys' となり，同様に 'shtetl'「ユダヤ人村落」のイディッシュ語複数形 'shtetlekh' も '-lekh' が外されて 'shtetls' となる。

英語 'bakery'「パン屋」の -ery は，製造所，販売所を表わす派生接尾辞だが，これをイディッシュ語 'knish'「ユダヤ風クレープ」に付けて，'knishery'「クニッシュ屋」を作る。

イディッシュ語名詞 'shlock' に，形容詞表示の派生接尾辞 -y を付ければ，'shlocky'「安っぽい」ができる。

イディッシュ語動詞を借用する際は，人称・数・時制に応じて屈折接尾辞を

Hosei University Repository

付けなければならない。'platzen'（burst→「爆笑する」）を借用した英語動詞'plotz'の過去形は，したがって'plotzed'となり，'shtup'（fuck）の現在分詞は'shtupping'となる。

4.5 統 語 法

文レベルでイディッシュ語の影響が最も顕著なのは，語順と抑揚（イントネーション）の多彩な組み合わせである。まず肯定文を，抑揚の変化だけで，疑問文にしてしまう方法がある。トロツキーからスターリンに次の電文が届いた——"You were right and I was wrong. You are the true heir of Lenin. I should apologize."「貴兄の方が正しく，小生は間違っていました。貴兄こそレーニンの真の継承者です。お詫びを申さねばなりません」得意満面のスターリンが赤の広場でこのメッセージを披露したところ，下から風采の上がらない仕立屋が「スターリン同志，もっと感情をこめて読んで下さい」と呼びかけた。「それじゃ君が読んでみたまえ」壇上に招かれた仕立屋は咳払いをしてこう読み上げた——"You were right and I was wróng? Yóu are the true heir of Lenin? Í should apologize???!! Trotzky!"(38)

逆に相手が問いかけてきた疑問文を，下降調で反復すれば，「何てことをきくんだ」と非難の気持を表わせる。レオ・ロステンは，"Did you send your mother flowers on her birthday?"という文で，前置詞'on'以外の8語各々に強勢を置き，ニュアンスがどう変わるか，実験している。もちろん相手の質問を反復する際，"Did I send my mother...?"と人称が変わるわけで，たとえば'my mother'の'my'に強勢を置けば，「君のおふくろさんにも花を送ったこのぼくが，自分のおふくろを忘れるはずないだろ」という意味になるそうだ。(39)

"Smart, he isn't"と形容詞を先行させ，その抑揚を加減するだけで，皮肉にも強調にも仕立て得る。このようないわば言葉の合気道が，アメリカ英語の表現をどれほど撥剌たらしめているか，測り知れないものがある。

ここで，イディッシュ語を第一常用語とするユダヤ人が，英語の語順を，その弾力性の限界ぎりぎりまで，即ち伝達不能の一歩手前まで変換してしまうさまを調べてみよう。マラムード作「白痴を先に」という短編の中で，白痴の息子アイザックを一人旅に出す父親メンデルのせりふだ。

"So in the morning," Mendel gasped as they ran, "there comes

Hosei University Repository

a man that he sells sandwiches and coffee. Eat but get change. When reaches California the train, will be waiting for you on the station Uncle Leo...."[40]

(二人して走りながら，メンデルはあえぎあえぎ言った。「いいな，朝になればサンドイッチとコーヒーを売りに来る。食べる前にお釣をもらうんだぞ。カリフォルニアに着いたらな，汽車が——お前を待っているぞ，ホームで，レオおじさんが」)

同じマラムードの短編「魔法の樽」でも，結婚周旋屋のピニエ・ソールツマンが（おそらく意識的に）花嫁候補の写真数葉の中に自分の娘のスナップショットをしのばせ，神学生レオがそれを選ぶと蒼ざめてこう言う——"Excuse me. Was an accident this picture. She isn't for you."[41]（「失礼。偶然まぎれ込んだんです，この写真は，あなた向きじゃありません」）語彙における隠語と同様，構文におけるこのような破格も，イディッシュ語に具わったカウンター・カルチャー的，つまり反主流的，挑発的，実験的な特性の一斑を窺わせるものである。

4.6 語用論的側面

1960年代と70年代に，イディッシュ語表現の人気に目をつけた広告業界が，とりわけユダヤ系消費者を当て込める商品の宣伝に，イディッシュ語彙をとり入れ始めた。グルデン社製マスタードの例——"The smart *balaboste* knows that garnish is far from gornisht."「賢い奥様は，つけ合わせが大切なことをご存じです」イディッシュ語 'baleboste'（housewife）を主語とし，英語 'garnish'「つけ合わせ」とイディッシュ語 'gornisht'（nothing）の語呂合わせが洒落れているわけだ。

"With this view, who needs Palm Beach?"——これは，ハドソン川西岸絶壁の上に建った集合住宅を宣伝したもので，これだけ風光明媚なら何もフロリダ州くんだりまで出かける必要はない，という意味になる。イディッシュ語 "Ver darf es?" の直訳とされる "Who needs it" 表現は仲々の曲者だ。上の例では明らかに「パーム・ビーチなど不必要」となるけれども，みるからに生意気なうぬぼれ屋が "Medical insurance? Who needs it?"「医療保険だって？ だれがそんなもの…」と吐き捨てるように言えば，「あるいは必要かもしれぬ」と意味が逆転してくる。パーム・ビーチの例そのものが，すで

Hosei University Repository

にひねくれているけれども，医療保険の例は，さらに裏をかいているわけだ。話し手のタイプ，抑揚の種類によって，この表現はさまざまな変数値を示す。

"Who needs it?" の系として，さらにややこしい "That's all I need." がある。素直に読めば「それこそ，私に必要なすべて」だが，その原文とみなされるイディッシュ語 "dos felt mir nokh." (That's all I lack yet.) は，不気味なニュアンスを孕む——「(今までの苦労も足らぬとばかり) またもやそんなひどい目にあわされるのか」"Another storm? That's all I need." つまり暴風雨がまたやってくるなんて，絶対に御免こうむりたい，という意味になる。

ジェフリー・リーチ著『語用論』の 6.3「アイロニーと冷やかし」で，冒頭にあがっている3つの例文 (34—36) は，何れもイディッシュ語表現の借用であり，借用と断るまでもないほど英語表現として市民権を得ているようである。[42]

(34) That's all I wanted! (それこそ，私が望んだことだ) (直訳)

(35) With friends like him, who needs enemies? (彼のような味方がいれば，誰が敵を必要としようか) (直訳)

(36) Bill wanted that news like he wanted a hole in the head.「ビルは頭の真中にあいた穴と同じくらい，そのニュースが欲しかった」(直訳)

(34)の真意は上述の通りであり，(35)の彼は，敵よりもっと始末の悪い友人であり，(36)は，イディッシュ語 "Ikh darf es (azoy) vi a lokh in kop." (I need it as a hole in the head.) の応用に過ぎない。つまり何よりも耳にしたくないのが，「そのニュース」である。

人前で吐露すれば反社交的になってしまう本心を，一応オブラートでくるみはするけれども，そのオブラートがすけすけで，結局本心の伝達を果たしてしまう仕掛け——これがアイロニーである。オブラートでくるんだ部分を 'pseudo-climax'「擬似クライマクス」，本心伝達の部分を 'super-climax'「極限クライマクス」と呼んでもよかろう。[43] 上記の3つの例文では，下へ進むほど，ダミーと本物のクライマックスがより対照的になってくる。その対照を最も明確に示す例として，ユダヤ人の呪い言葉を2つだけあげて置こう。

"May you prosper like the saloon keeper who just buried the last drunk in town."[44] (酒場の主人のように繁昌しますように，但し町で最後の呑兵衛を埋葬した後のね)

Hosei University Repository

"May God's countenance shine upon you like the moon at the end of the month."[45]（神のお顔があなたの上に輝かんことを，但し細い三日月のようにね）

語用論的側面には，当然社会学的事象が介入してくる。少数集団としてのユダヤ教徒は，圧倒的主流たるキリスト教徒のクリスマス祝賀を強制されているような気分らしく，'Santa Claus' を 'Santa Klutz（とんま）' と呼んだり，'Merry Xmas' を 'Merry Kratz Mikh（背中を掻いてくれ）' と言い換えたり，"Deck the halls with boughs of holly"（ヒイラギの枝で広間を飾れ）という有名な讃美歌の 'holly' を 'khallah'「安息日用パン」とわざわざ摩擦音を響かせて発音するなど，ユーモラスな地口で応酬しているようだ。

5. 結　　語

イディッシュ語と英語の相互作用で主導権を握ってきたのは勿論英語の方であり，とくにユダヤ系新移民が同化にこれ努めていた間は，アングロ・サクソン系主流社会でそのまま通用するきまり文句をせっせと導入し，日常会話だけでなく文語からもイディッシュ語臭を消し去ろうと懸命であった。当時新移民たちが英語学習に用いていたアレグザンダー・ハルカヴィの『英イ対訳模範書簡集』(1892)[46]は，彼らの真剣な同化志向に副うという意味では無類の好著だったとされる。

別にイディッシュ語を使わずとも，英語でユダヤ的な考え方や感じ方を表わせるようになったのは，ゲットー住民の言語習慣を活写したヘンリー・ロスの *Call It Sleep*『その名は眠り』(1934) あたりからだろう。ユダヤ系作家たちが，イディッシュ語の語彙や構文を交えて，ユダヤ性への愛着を表明し始めるのは1950年代に入ってからであり，マラムードはセピア色の Yinglish で効果をあげ，ベローは「母語」を格調高く引用し，ロスの場合は隠語一辺倒という感じさえする。いずれにせよ，このようにイディッシュ語を捨て切れないのが，三者共通の創作態度だとすれば，シンシア・オジックならずとも，本質的にキリスト教徒の言語たる英語で，ユダヤ的概念を核とした真にユダヤ的な小説が一体書けるのかどうか，危惧の念なきを得まい。英語のみに頼る精神生活では不安だからこそ，イディッシュ語の本性がたえず問われているのだろう。

マラムードに「物言う馬」("Talking Horse") という短編があり，まさにその物言う馬アブラモヴィッチこそ，アメリカにおけるイディッシュ語の象徴

Hosei University Repository

だ，とする見解がある。[47] この奇妙な馬は，聾唖の主人ゴールドバーグがモールス信号で出す問いに，人間の肉声で答える曲芸をなりわいとしている。逆に馬の方から主人に質問を試みると，主人は烈火のごとく憤り，殴って脅しつける。馬はサーカスの観衆に「助けてくれ，ここから出してくれ，ぼくは君たちと同じ人間だぞ，これじゃ奴隷だよ，自由にしてくれ」と呼びかける。やがて馬は主人に襲いかかり，主人が馬の耳をひっつかんだ拍子に，頭と首が抜けてしまう。中から鼻眼鏡をかけ，黒い口鬚を生やし，眼光烱々たる40歳代前半の男が姿を現わし，馬の外皮から引き抜いた両腕で主人の首をしめつける。アブラモヴィッチはへそのところまで馬の体から脱け出し，半人半馬の姿で，野原を横切り森へ入って行く。

「物言う馬」の名前アブラモヴィッチは，第一章で述べた通り，イディッシュ文学の祖父と称されたメンデレ・モイヘル・スフォーリムの本名であり，その壮年時代の風貌も，上の描写と相違しないから，まさにイディッシュ語の象徴と解してよかろう。他方，馬の質問で自分の正体がばれるのを怖れ，暴力で黙らせた聾唖の主人ゴールドバーグは，同化に汲々としてユダヤ性の表出には耳も口もかそうとしない俗悪タイプのユダヤ系アメリカ人とみてよかろう。

半人半馬というのは神話的比喩だから，重層的解釈が可能である。標準イディッシュ語と野放図に借用された外来語要素の関係，あるいはぼろ布の寄せ集めみたいなイディッシュ語と綾錦のように織り上がったイディッシュ文学の対照，という考え方もできる。さらに半人を意識，半馬を意識下と置けば，半馬は俗臭芬々として攻撃性鬱勃たる呪咀，隠語，皮肉，諷刺等の獣的人間像，半人はそれを聖者，賢人の悟りの境地にまで昇華させた理性的人間像ということになろう。「善は悪の椅子に坐る」というハシディズムの教え通り，善と悪の間には相関と互換性があり，この半人半馬的人間観を驚くべき振幅で描出したのが，I.B.シンガーの作品に他ならない。

半人半馬のアブラモヴィッチが森に入ったというのは，中心よりもむしろ周縁で生きようという意図を窺わせるもので，言語のロビン・フッドといわれるイディッシュ語の本質をよく表わしている。権力者のふところに入り込んで混乱を巻き起こし，富者から盗んで貧者に分け与え，身分の如何にかかわらず客人を厚くもてなしたというロビン・フッドの生き方は，まさに融合言語的である。

イディッシュ語の発達からも推察される通り，融合言語は，異文化，異教が

Hosei University Repository

相交わる境界線上で発達するものだろう。ある国家に属しながらその正式な一員とは認められなかった離散ユダヤ人同様，彼らの言語たるイディッシュ語も，永遠の周縁言語，パーリア言語となる他なかった。パーリア民族でも資質は主流民族のそれに劣らないことを遺憾なく実証したのがユダヤ人であり，その歴史と文化が溶け込んだるつぼとして，イディッシュ語は，内容だけでなく凝集性と鮮度に秀でた表現表象を湛えている。

権力を持たず，ひたすら為政者の理性に訴えるしかすべのない民族が，非理性的言動の批判に有効な表現を発達させるのは当然で，芳しからぬ人間のタイプや心理について，イディッシュ語ほど多彩な形容語句を具えた言語は稀だろう。勢い，上位言語側にとっては恰好な俗語・隠語源となる。また正面切っての非難は身の危険を招くから，本心とは裏腹の皮肉っぽい表現，アイロニーの技巧が常套となる。イディッシュ語は，百戦練磨の「カウンター・カルチャー」言語で，かりに将来その話し手の分布が統計的に無意味なほど稀薄化しても，その精神とリズムは上位言語に乗り移って生き永らえるだろう。だからこそ，シンシア・オジックは，英語で執筆しながらも，それを「新しいイディッシュ語」(a new Yiddish) と称しているのである。

再考してみれば，半人半馬的でない人間の言語などあり得べくもない。「ユダヤ人は他民族同様に人間的だ，ただ他より余分に人間的なだけである (only more so)」とよくいわれるが，イディッシュ語の場合も，他言語より一寸余分に半人半馬的ということだろう。崩れたドイツ語という印象は拭いがたく，高踏派の詩を万才調で朗読するような可笑しみは，どうしてもイディッシュ語につきまとう。しかし人間存在とはそうしたもので，そのちぐはぐの可笑しみを奔放鮮烈に露呈してきたからこそ，この言語は軽蔑され，嫌悪されるとともに，尊重され，愛好されているのである。

（この論文は，昭和62年度文部省科学研究費補助金によるリサーチの一部をなすものです。）

注

（1） *American Jewish Year Book Vol. 86*, American Jewish Committee, 1986, pp. 357–359.

（2） Sol Steinmetz: *Yiddish and English*, The University of Alabama Press, 1986, p. 152, Note(2).

Hosei University Repository

(3) Steinmetz: op. cit., p. 29.
(4) 松浪・池上・今井共編『大修館英語学事典』, 1983, p. 153.
(5) Leo Rosten: *The Joys of Yiddish*, Penguin Books, 1971, p. 538. Rashi は Rabbi Shlomo Yitzhaki の頭字読みで, 英語の表記だと, Solomon ben Isaac of Troyes [trwa] になる。
(6) Thomas L. Markey: "Response" to Professor Marvin Herzog's paper "Yiddish," *Jewish Languages—Theme and Variations*, Association for Jewish Studies, 1978, p. 60.
(7) たとえば「文字」という意味のヘブライ語は, 単数 'ot' 複数 'otiyot' だが, イディッシュ語では, ヘブライ語綴りをそのまま用いながら, 各々 os, oysyes と発音する (本稿では, ヘブライ文字を使用できないため, イディッシュ語とヘブライ語の表記をすべてローマ字化する他ない)。
以下イディッシュ語の表記は, YIVO 方式に従う。YIVO とは, 1925年リトアニアのヴィルナで創設された Yidisher Visenshaftlikher Institut の略称。YIVO は東欧ユダヤ文化の最も権威ある研究・教育機関で, 第二次大戦中に本部をニューヨークへ移した。英語の名称は YIVO Institute for Jewish Research。全米各大学のイディッシュ語教員は, 大半がコロンビア大学・YIVO 共催のイディッシュ語コースを終了しているから, YIVO 制定のローマ字表記は定着しつつある。主な特徴は, 二重母音 ai, ei, oi を ay, ey, oy と綴り, 無声摩擦音 ch は一切 kh で表わす。sch, tsch, は各々 sh, tsh となり, その有声音は zh, dzh, また ts の有声音は dz となる。他は大体ローマ字通りと考えて差支えない。
(8) Max Weinreich: *History of the Yiddish Language* (the University of Chicago Press, 1980) の第3章 "The Language of the Way of the SHaS" (pp. 175—246) を参照。同書はイディッシュ語原書 *Geshikhte fun der yidisher shprakh*(YIVO, 1973) を Shlomo Noble と Joshua A. Fishman が英訳したもの。英訳は原書の本文 (1, 2巻) のみで, 注解 (3, 4巻) を省いてある。上記第3章 "di shprakh fun derekh-haSHaS" は Vol. 1, pp. 184—250.
(9) この書物は英訳で入手可能。Moses Gaster: *Maaseh Book*, The Jewish Publication Society, 1934, 1961, 1981; 694 pp.
(10) *Encyclopedia Judaica Vol. 16*, Keter Publishing House, 1972, p. 796. Yiddish language の項。執筆者は Uriel Weinreich.
(11) Uriel Weinreich: *College Yiddish*, Fifth Revised Edition, YIVO, 1971, pp. 43–44.
(12) Dan Miron: *A Traveler Disguised*, Schocken Books Inc., 1973.
(13) *The New Standard Jewish Encyclopedia*, Doubleday & Company, Inc., 1977. Poale Zion の項参照。
(14) Ande Manners: *Poor Cousins*, Coward, McCann & Geoghegan, Inc., 1972, p. 76.
(15) Leo Rosten: op. cit., p. 436.
(16) Steinmetz: op. cit., p. 18.
(17) Irving Howe: *World of Our Fathers*, Harcourt Brace Jovanovich, 1976, p. 475 を参照。
(18) 今日のイスラエルでは, イディッシュ語に対する反感が鎮静し, 新聞雑誌の発刊

Hosei University Repository

や芝居の上演も認可されている。勿論ヘブライ語の権威は絶対的だが，ユダヤ人の歴史的経験を溶け込ませたるつぼとして，イディッシュ語再評価の気運は高まりつつあり，現に国内5大学のすべてがイディッシュ語コースを設けている。特記すべきは「イスラエルの声」(Kol Israel)が毎晩2時間にわたって流すイディッシュ語放送で，30分間ニュースを読んだ後解説に移る。木曜はニュースの後 'Dos Lid Vos Mir Zingen' (The Song We Sing) という音楽番組が始まる。ハシディック・メロディーから社会主義者のマーチまで，ゲットーの歌から恋歌まで，さらに「フィガロの結婚」のイディッシュ語訳アリアまで飛び出す。

(19) 昨今ユダヤ系アメリカ文学は沈滞期に入ったといわれる。ハロルド・ブルームによれば，「アメリカ・ユダヤ文化というのは，アメリカ的でも，ユダヤ的でも，文化的でもない。ハイネ，フロイト，カフカを生み出した<ディアスポラ>の精神的風土がアメリカにはないのだ。ユダヤ系アメリカ文学など，ノーベル賞作家も含めてことごとく二流だ」ということになる。ベロー，ロス等ベテランと並んで，気鋭のシンシア・オジックやマーク・ヘルプリンが民族性濃厚な作品を書き続けているけれども，一般読者にはなじみにくかろう。

(20) Leo Rosten, op. cit. (注5)。以下 *Joys* と略記する。

(21) Leo Rosten: *Hooray for Yiddish*, Corgi Books, 1984 (U. S. edition, 1982) 以下 *Hooray* と略記する。

(22) Lillian Mermin Feinsilver: *The Taste of Yiddish*, A. S. Barnes and Company, 1970, reprinted 1980.

(23) Maurice Samuel: *In Praise of Yiddish*, Cowles Book Company, Inc., 1971.

(24) Sharon & Michael Strassfeld: *The First Jewish Catalogue*, the Jewish Publication Society, 1973; *Second*, 1976; *Third*, 1980.

(25) Steinmetz: op. cit., p. 26.

(26) ibid., p. 29.

(27) ibid., p. 87.

(28) U. ワインライヒ著，神島武彦訳『言語間の接触』，岩波書店，1976, p. 137.
以下，ドーザのこの原理に依拠しつつ，スタインメッツ(注2)，ファインシルヴァー(注21)，レオ・ロステン（注14，20）の著書から収集した実例を分類整理して行く。スタインメッツの本は，小冊ながら，既刊類書の成果を摂取している他，正統派中核が用いている「アシュケナジー英語」の一班を紹介しており，本稿執筆に不可欠であった。実例に言語学的分析を加えたより詳細な新著の刊行が望まれる。ファインシルヴァーの本は，スタインメッツの上記著書の重要なソース・ブックになっている。用例は豊富だが，分析と整理にもう一工夫ほしい。レオ・ロステン著の上記2冊は，発音，語義，語源にユーモラスな挿話を加えて，語句のニュアンスを伝える楽しいフレーズ・ブック。彼のユーモア小説 *The Education of H*y*m*a*n K*a*p*l*a*n* (1937) は，ユダヤ系新移民が英語学習で犯しがちな発音上・文法上のエラーを面白可笑しく描いており，借用語の転訛についても示唆に富む好資料。

(29) Steinmetz: op. cit., p. 35.

(30) Eric Partridge: *Slang—Today and Yesterday*, Routledge & Kegan Paul Ltd., Third Ed., 1950, p. 298.

(31) 渡辺友左著『隠語の世界』，南雲堂，1981, p. 52.

Hosei University Repository

(32) H. L. Mencken : *The American Language : Supplement I*, Alfred Knopf, 1963, p. 433 参照。
(33) Leo Rosten : *Hooray*, p. 249.
(34) L. M. Feinsilver : op. cit., p. 365.
(35) Bernard Malamud : "The German Refugee," *The Stories of B. M.*, Farrar Straus Giroux, 1983, p. 100.
(36) Leo Rosten : *Joys*, pp. 280–282.
(37) ibid., pp. 274–276.
(38) ibid., Preface pp. xxiv–xxv.
(39) Leo Rosten : *Hooray*, p. 30.
(40) Bernard Malamud : "Idiots First," op. cit., p. 43.
(41) ibid., "Magic Barrel," p. 141.
(42) ジェフリー・N・リーチ著，池上嘉彦・河上誓作共訳『語用論』，紀伊国屋書店，1987，pp. 207–211.
(43) Feinsilver, op. cit., p. 64.
(44) Benjamin Einhorn : *Jewish Curses for All Occasions*, Ace Publishing Corporation, 1970, p. 106.
(45) ibid., p. 24.
(46) Alexander Harkavy : *Amerikanisher Briefen-Shteler un Speller—English un Yiddish (American Letter-Writer and Speller)*, New York, 1892.
(47) Kathryn Hellerstein : "Yiddish Voices in American English," *The State of the Language* (edited by L. Michaels & C. Ricks), University of California Press, 1980, p. 200. 注記によればヘラースタインにこの読み方を示唆したのは，編者の一人レナード・マイケルズ。